

歯は口より、 ものを言い!?

小池デンタル
クリニック発



妊娠中の歯科治療について

妊娠されると「歯科検診をしましょう!」、「お口の手入れをしっかりやりましょう!」といった話をお聞きになるかと思いますが。産婦人科で配布される冊子の中にもよく記載されています。当クリニックでも小池病院へ来院された妊婦さんには「歯科検診」を推奨しています。

妊娠中の大変な時期に、なぜ歯科に通うことを勧めるのでしょうか?

妊娠すると女性ホルモンが増加します。それに伴って歯周病の病原菌が通常時より増加します。その数“約5倍”。これを聞くだけでもお口の中の環境が悪化していることがわかりますよね。これにより「妊娠性歯周炎」、「むし歯」、「智歯周囲炎(親知らずの炎症)」、「口臭の増加」、「口内炎」、「妊娠性エプーリス(歯肉腫の一種で歯ぐきに局限してできる良性の腫瘍)」などがみられるようになります。とくに「妊娠性歯周炎」は気をつけて欲しい病気です。多くの研究から、歯周病の病原菌が出す内毒素(エンドトキシン)が子宮を収縮させるホルモンに似ているため「早産」や「低体重児出産」を引き起こすと言われています。さらに学会などでは“出産のリスクは約7倍”といったデータも出ています。このため歯周病と診断された方や歯周病の自覚のある方には、妊娠中からの治療を“特に”おすすめします。きちんとした歯周治療と正しい歯磨きを行うことで歯周病原菌からのリスクは回避することが可能です。

では、「むし歯」が見つかった場合はどうすればいいでしょう?

妊娠安定期までは赤ちゃんがしっかりと胎盤に着いていないので刺激を避けるため、治療をしない方が無難です。また、出産前も今度は赤ちゃんが胎盤から離れる準備を始めますので、ここでも余分な刺激を与えないように治療を行いません。よって推奨時

期は5~8ヵ月頃となります。

治療にともなうレントゲンを不安に思う方がいられるかと思いますが。しかし歯はお腹から場所が離れており、さらに鉛のエプロンをしていただきますので、おなかの赤ちゃんが被曝する量は限りなくゼロに近く、赤ちゃんへの被曝の影響はまったくないのに等しいことがわかっています。また、当クリニックの歯科用CTなどのエックス線撮影装置はデジタル撮影となっており、従来のフィルムタイプに比べて被曝量も少なくなっています。歯科用CTですら約35 μ Sv(マイクロシーベルト)であり、日常生活での1日あたりの被曝量が日本平均で約4.1 μ Sv、世界平均で約6.6 μ Sv、東京⇄ニューヨーク間航空機で往復が約200 μ Sv、さらに胸部CT撮影が約6,900 μ Svであることから考えると非常に少量の被曝量なので安心していただけたらと思います。

歯科治療に使う麻酔は、全身麻酔ではなく局所麻酔です。さらに血管収縮剤が入っているため、治療をする歯の周辺に麻酔薬は停滞します。お腹の赤ちゃんに影響する心配はありません。薬も同様に小池病院でも処方している妊産婦さんに安全に服用していただける抗生物質や痛み止めを使用していますので、心配せずにお飲みいただけます。

これまで述べたように、妊娠中の歯科治療は時期を考慮して治療すれば、より安全に出産するための手助けとなります。しっかりお口の中の手入れをして、きれいなお口で元気な赤ちゃんを迎えましょう。

院長 小池 秀行



レントゲン・CT室